

聖霊降臨後第12主日礼拝

「主イエスの選んだ弟子たち」

創世記35:23-26

ルカ6:12-19

1. 主イエスは、12人の弟子たちを選ぶにあたり、山に登り、徹夜して祈られました。

イスラエル民族は、族長ヤコブの腰から生まれた12人の子らが、12部族を形成してきたのですが、主イエスは、「肉のイスラエル」ではなく、「新たなイスラエル」を考えておられたようです。まず、弟子たちの中から、当時90人ほどの弟子たちがいたといわれています。12人を選び、彼らを「使徒」として派遣し、使徒的権威の下に、「キリストの教会」を立てることを願われました。

「使徒」とは、いわば、主イエスの「代理人」。「全権大使」ともいえます。世界各国に、「日本大使館」がありますが、大使館内は、いかなる事情があろうと、外部のものが立ち入ることはできません。そこは聖域であり、治外法権とされ、「大使」(アンバサダー)は日本の顔を代表しています。

主イエスから選ばれた「弟子」とは、いわば、「アンバサダー」でもあります。その重大な使命を与える弟子を選ぶにあたり、主イエスは夜を徹して祈られたことです。ところが選ばれた12人の顔ぶれを見ますと、少々、首をかじびたくなめじうがあります。選ばれた者たちのほととどは、ユダヤ社会で

は無名に等しい人々です。

キリストの全権大使として、「地の果てまで、あなたがたを遣わす」とまで願われているとすれば、できる限り有能な人物を選ぶのが普通です。知名度のある人物を選べば周囲の好感度が増します。資産家を選べば伝道資金の調達が可能です。政治家を選べば、顔パスがきき、物事がスムーズに運びます。

弟子を選ぶにあたり、こうしたことを考慮して、慎重に吟味して、適材適所の人物を選びます。しかし、主イエスが徹夜して祈り、選んだ弟子たちの全ては無名の人物でありました。しかし、無名ではありませんが、何とも多様な人物が選ばれています。

直情径行な性格の「シモン・ペテロ」。何事にも慎重な「トマス」。「雷の子」とニックネームのつけられていた「ヨハネ」。「彼こそまことのイスラエル人」と最大級のお褒めの言葉をいただいた「ナタナエル」(別名バルトロマイ)。収税人の「マタイ」。熱心な愛国党「シモン」など、が選ばれたのです。

しかし、どんなに平凡な人物であっても、もし、品行方正、人格高潔な人物が選ばれていれば多少は納得できます。

しかし、選ばれた「ヤコブ」と「ヨハネ」ですが、「あなたが栄光をお受けになる時、自分たちをあなたの右と左に置いて下さい」と主イエスに願い出た時、主イエスから厳しいお叱りを受けています。(マルコ10章)。

さらに、さらに、「一番魔訶不思議ともいえる

ことは、「イスカリオテのユダ」が選ばれていることです。ユダは、銀貨30枚で主イエスを裏切った人物として、その名を世に馳せました。

しかし、よくよく考えれば、ユダだけが、主イエスを裏切ったわけではありません。一番弟子であった「ペテロ」でさえも、主イエスが逮捕された時、周囲の目を恐れて、イエスを拒否しました。愛する主イエスのためなら獄にまで、いえ、死にいたるまで、と覚悟のほどを口にした。ペテロだけでなく、他の弟子たちもまた、主イエスを見捨てて逃げ出したのです。

そうしたことを考え合わせると、主イエスが徹夜までして祈り、選ばれた弟子たちでしたが、なんとも根性のない、お粗末な人物たちが選ばれたと言わざるをえません。

主イエスの弟子選びは、完全な失敗―、ミス・テイクであったのでしょうか。

(2)

主イエスは、選ばれた12人が、すべからず弱い者たちであることを十分承知しておられました。万一になると、自分を見捨てて―  
―、そうした、信念も、根性もない、信仰的にも、人間的にも、不確かな者たちであることを十分に承知した上で、弟子の12人を  
お選びになられたようです。

それは、また、わたしたちを召し選ばれる時にも、同じことがいえるのではないのでしょうか。

わたしたちは、主イエスから、直に選ばれた弟子ではありませんが、わたしたちもまた同じお方・イエス・キリストにより、召し、選ばれたことに変わりはありません。

エペソ人への手紙の1章4節には、「天地創造の前に、神はわたしたちを愛して、御自分の前で、聖なる者、汚れのない者にしようと、キリストにおいてお選びになりました」とあります。すべての者が救われることを願っておられるお方が、わたしたちのような不確かな者を、多くの者の中から、あえて選び、召して下さったとすれば、考えれば考えるほど不思議なことです。

「ああ深いかな、神の知恵と知識との富は・・・」と言わざるをえません。それが、神のみこころであると言われれば、「アーメン」と応えざるをえません。

しかし、それにしても、「神はなぜ、こうまで不確かな者をお選びになったのか」という疑問は依然として残ります。キリストの者とせられていても、小さな試みに会えば、直ぐにつまずく者です。しかも、主に頼りたのむこととは少なく、隣り人を愛することにおいて、いまだ不十分であります。こうまで不確かなわたしたちを、どうして、キリストはお選びになったのかと思われるのですが、弱いわたしたちをお選びになったとしか言いようがありません。

「神はあらかじめ」知っておられる者たちを

定めてくださったー、そして、『あらかじめ』  
定めた者たちを召し、さらに、召した者たち  
を義とし、義とした者たちには、さらに栄光  
を与えて下さった」とは、ローマ8章30節  
以下の御言のお約束です。

「あらかじめ」「あらかじめ」といわれてい  
る箇所を見つめ直せば見つめ直すほど、キリ  
スト者とせられたことは、こうしたことか  
と気付かされて、御名を崇めて感謝するほか  
はありません。

主イエスが、徹夜して選んだ12の弟子たち  
とは、選ばれるに足るだけの資格や根拠があ  
ったわけではありません。・・・にもかかわ  
らず、彼らは選ばれました。そこには、選ぶ  
にあたり主イエスの側に秘められた原則があ  
りました。

コリント人への第一の手紙1章26から31  
節に、「兄弟たちよ。あなたがたが召された時  
のことを考えてみるがよい。人間的には、知  
恵のある者は多くはなく、権力のある者も多  
くはなく、身分の高い者も多くはないこと。

それなのに神は、知者はずかしめるために、  
この世の愚かな者を選び、強い者はずかし  
めるために、この世の弱い者を選び、有力な  
者を無力な者にするために、この世で身分の  
低い者や軽んじられている者、すなわち、無  
きに等しい者を、あえて選ばれたのである。

それは、どんな人間でも、神のみまに誇る  
じぶがないためです。」

「無に等しい者を、あえてお選びになった」

①コリ1：26以下)とあります。主イエス  
の12弟子の選びの原則とは、そうしたもので  
あった、と謙遜に受け止めなくてはなりま  
せん。

何万人に一人から厳選して合格した弟子で  
はありません。彼らが弟子として選ばれたの  
は、どこからみても、選ばれるに値したから  
ではありません。主がお選びになり、召され  
た者たちであるー、これがすべてであります。  
「あなたがたが、わたしを選んだのではない。  
わたしが、あなたがたを選んだのである。そ  
して、あなたがたを立てた。それは、あなた  
がた行って実を結び、その実がいつまでも  
残るためである」(ヨハネ15：16)。

・・・であるとするれば、弱さであれ、つま  
ずきであれ、そのすべてをご承知のお方が選  
んで下さったのだと承知すればー、わたし  
たちの弱さをゆだねるしかありません。全て  
は自分の頑張りと精進と努力にかかっている  
ではありません。「すべての事は、人間の願  
いや努力によるのではなく、あわれんでくだ  
さる神によるからです」(ローマ9：16)と  
あります。

わたしが学生の時です、友人がわたしのな  
りふりを見て、「それでもクリスチャンなの  
か」といぶかしげに見つめたことがあります  
た。「こんな情けない者でも、主イエスの弟子  
として下さったことを感謝します」と祈った  
ことを覚えています。

(3)

「ところで、今朝は、どうしても避けて通れない難問があります。それは「ユダ」です。彼が選ばれたわけが分かりません。謎めいています。不可解ですらあります。福音書の中で一番難解、かつ、ミステリアスな箇所でもあります。

「ユダ」は、彼一人だけが「死海」のほとりの南部地方の出でした。しかも、弟子たちの財布管理をまかされていたのですから、仲間から信用されていた人物なのです。ヨハネ福音書6章70節、「イエスは彼らに言われた。『あなたがた十二人を選んだのはわたしではなかったか。それだにあなたがたのうちの一人は悪魔である。』とあります。どうして、ユダだけがマイナスの存在となったのかについては、さまざま解釈がなされてきました。主イエスが徹夜して祈り、選んだはずのユダです、その彼がご自分を裏切ったとすれば、どうしてこうまで不確かな人物を選んだのか、それとも、主イエスは、人を見る目がなかったのでしょうか、それとも、あえてユダを選ばれたのには、他に深い仔細や意図でもあったとでもいうのでしょつか。

国道2号線の道路わきに、事故を起してメチャメチャに壊れた一台の自動車が放置されていました。ああした悲惨な事故の現場をいつも見ていると、人間は安全運転を心がけないものです。同じように、何時も十字架にかりしままなるキリストを仰ぎみていないと、わたしたちもダメになるといふことでは

ようか。

12弟子の中から、主イエスを裏切る者が出た事は、弟子の選びが失敗であったとか、主イエスというお方が、人間の罪深さに対する洞察が欠けていたなどということではありえません。

よくよく考えてみますと、ユダが主イエスを裏切ることすら出来たということは、人の側からいえば、自らの意志で神の恩寵をも拒むことすらも許されている——、ということではないのか。

神から選ばれたことを感謝もすれば、拒むことすらもできるのです。人間は、機械仕掛けのロボットではありません。神と人とは、「あなた」と「わたし」の関係です。呼び交わし合えるほど「パーソナル」な、響き合える人格的な関係であります。

「神の選び」を拒むことの自由をも含んでいる、その余地を残しているといえるのかも知れません。「極みまでのイエスの愛」を、ユダという弟子が裏切ったのです。人間の罪深さを思わないわけにはいきません。

ところで、「裏切る」という言葉は、「引き渡す」とも訳せます。しかし、神のご計画を変更しうるほど、人間は、だいそれた存在ではありません。ユダが、主イエスを裏切ろうと裏切るまいと、ユダの裏切りを過大評価してはならないのであります。ユダは、ただ、主イエスを十字架へと、「引き渡す」役目を果たしたにすぎません。

主イエスが人の手に引き渡される前の夜、弟子たちと共に、「最後の晩餐」を持ちましたが、その時もユダは同席しておりました。

福音書を見る限り、イエス・キリストの恵みは、ユダに対して惜しみなく注がれているのです。そこには、何の制約も制限もありません。しかし、それでも、彼の「救い」に関して、福音書は一切沈黙しています。「ユダは」救われた」とも、「永遠に遺棄された」とも述べておりません。

わたしたちは、ここで、主イエスがユダに対して「お前を選んだのはわたしではなかったか。それなのに・・・」と嘆かれておられる主イエスの言葉に注意しなければなりません。イスカリオテのユダの悲劇は、ひとえに、イエスの弟子として選ばれていたにもかかわらず、ユダは最後までそうした自覚がなかったようです。もし、自覚していたとすれば、愛する主イエスを、ああまで裏切ることもしなかつたでしょうし、裏切った後、ああした悲惨な死に方をしなかつたと思われまふ。つまり、ユダが最後に救われたかどうかは、われわれ人間の側で、あれこれ詮議すべきことではありません。最後まで、ユダの救いに関しては、神の判断に委ねなくてはなりません。

人から裏切られた経験があるかもしれせん。そのことを思い出すたびに腹が立つかも知れませんが、主イエスは、ユダに、その時も「友よ」と呼びかけました。「友よ、しやう

としていることをするがよい」とまで言われました。「ユダと直に目と目を合わせながら、主イエスは「友よ」と呼びかけました。この時も、何とかして、悪魔に捕らわれている彼を「友」として勝ち取るうとしていたのではないのでしょうか。「ユダ」福音とは何か」というエッセンスが凝縮しているようです。主イエスは最後の最後までユダのために祈られました。

わたしたちの召しと選びを思いみて、工事を正すべきであります。

【祈ります】

天の父よ、福音書にはわからないことが時々あります。わからないことはわからないこととして読み続けることができますように、無理して解釈したり、結論つけずに、わからせてくたさる時まで、ゆだねることができまふように、主イエス・キリストのお名前により祈ります。「アーメン」